

新型コロナウイルス感染拡大期と比較した生活の変化

— ICT 利用のライフスタイル研究 —

佐藤 仁（NTT ドコモ モバイル社会研究所）、飽戸 弘（東京大学名誉教授）

キーワード：新型コロナウイルス、感染症対策、ライフスタイル、オンライン

【背景と仮説】

2020 年以降の新型コロナウイルス感染拡大によって、人々の生活スタイルが大きく変わった。コロナ禍においてテレワーク、キャッシュレス、オンライン学習など感染症対策に関する様々な生活スタイルが登場した。また家族や友人との旅行、コミュニケーションのスタイルもコロナ禍の前に比べると大きく変化した。コロナ禍が明けて人々の日常生活でもマスクを外したり、家族や友人らと旅行に出かけたりなどコロナ感染拡大期前に戻ってきた。コロナ禍を経たライフスタイルの定着と変化の意識について、テレワークやキャッシュレスなど感染症対策の行動が増えた人は、新しいライフスタイルが定着していると認識しているのではないかと、行動が減った人は、新しいライフスタイルが定着していないという仮説をもとに検討。

【調査方法】

調査時期：2024 年 2 月 対象：全国 15-79 歳
割り付け：性・年代（5 歳刻み）、都道府県、都市区分、WEB 調査、サンプルサイズ 6251

【手続き】

コロナ禍と比較した生活での増減に関する質問の設問を用いて因子（主因子法）・クラスタ分析（k-means 法）で解析。

コロナ禍と比較した生活での増減で以下 4 つのクラスタを抽出。①行動減少派（コロナ禍に比べて様々な行動が減少）、②交流派（友人との食事・コミュニケーション、旅行等が増加）、③感染症対策と日常生活派（テレワークなど感染症対策と家族との食事など日常生活が増加）、④感染症対策と交流派（感染症対策と交流が増加）。

析出されたクラスタについて、各クラスタの所属サンプルの特徴について、コロナ禍を経た生活の変化に着目した分析を実施。またそれぞれのクラスタで性・年代別でも検討。

【結果・考察】

コロナ禍と比較した生活での増減クラスタで男性は「①行動減少派」が約 3 割で女性よりもやや多かった。女性は「③感染症対策と日常生活派」が約 2 割で男性よ

りもやや多かった。10 代の若年層では「④感染症対策と交流派」が 6 割超えて他の世代よりも多かった。60～70 代のシニア層は「③感染症対策と日常生活派」が約 2～3 割と他世代よりも多かった。

コロナ禍と比較した生活での増減クラスタとコロナ禍を経た以下の 5 つの生活の変化の分析を行った。

1. コロナ禍に生活習慣が変化して、現在はさらに生活習慣が変化（① さらに変化）
2. コロナ禍に生活習慣が変化して、現在でも概ねその生活習慣が根付いている（② 概ね定着）
3. コロナ禍に生活習慣が変化して、現在でも一部その生活習慣が根付いている（③ 一部定着）
4. コロナ禍に生活習慣が変化したが、現在はコロナ禍以前の生活習慣に戻った（④ コロナ前に戻った）
5. コロナ禍以前から現在に至るまで生活習慣は何も変わっていない（⑤ 変化なし）。

以下のような結果が導き出された（図 1）。

- (1) コロナ禍に生活習慣が変化し、現在さらに生活習慣が変化している人の約半数が「感染症対策と交流派」
- (2) コロナ禍に生活習慣が変化したが、現在はコロナ禍以前に戻った人の 3 割強が「行動減少派」
- (3) コロナ禍以前から現在に至るまで何も変わっていない人の約半数がコロナ禍と比べて様々な行動が減少した「行動減少派」

	①行動減少派	②交流派	③感染症対策と日常生活派	④感染症対策と交流派
①さらに変化	12.7%	18.8%	19.4%	49.1%
②概ね定着	17.7%	14.1%	24.2%	44.0%
③一部定着	24.2%	23.8%	17.3%	34.6%
④コロナ前に戻った	34.9%	19.0%	13.5%	32.5%
⑤変化なし	45.2%	8.7%	9.1%	36.9%
全体	27.2%	16.2%	16.9%	39.6%

図 1：生活の増減クラスタとコロナ禍後の生活の変化の関係

【参考文献】

- ・「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」（内閣府）2020 年 6 月～2023 年 4 月まで 6 回実施
- ・北條規「ニューノーマル時代における消費市場の変化とアフターコロナの新しい潮流についての考察」（大正大学「地域構想」2023 年）など